

タイトル	「仏性かならず成仏と同参するなり」
著者	船岡，誠； FUNAOKA, Makoto
引用	北海学園大学人文論集(62)： 5-12
発行日	2017-03-31



船岡 誠教授

「仏性かならず成仏と同参するなり」

船 岡 誠

平成5年4月、わたしは北海学園大学に赴任しました。そう、わが人文学部発足の年です。その2年ほど前だったと思いますが、永井秀夫先生からかつての北大時代の同僚であった大隅和雄先生(現東京女子大名誉教授)に、日本思想史の適任者をとのお話がありました。大隅先生とは研究会などでご一緒していました。わたしがその適任者であるかは自信がありませんでしたが、日本文化学科の思想史担当ということで、日本文化を禅の面から考えることにながしかの貢献ができるのでは、と期待に胸をふくらませ赴任いたしました。当時は“大家”然とした先生が多く、わたしなどはまさに「若手」でした。

光陰矢のごとし、その「若手」のはずのわたしも、いつのまにか年だけはとって定年をむかえることになりました。この間、わたしが人文学部にどれほどの貢献ができたのかを思うとき、内心忸怩たるものがありますが、今となってはそれも詮ないこと。

かつて『人文フォーラム』という自己点検と広報をかねたような小冊子がありました。年2回発行の『人文フォーラム』の巻頭には、学部長の巻頭言が載ります。ちょうど学部発足10年目の『人文フォーラム』の巻頭に「可能性の模索」という拙文が載りました。定年退職者は「別れのことば」を本誌『人文論集』に書く慣例となっているので、その拙文の一部をもって「別れのことば」に代えたいと思います。

バイスの『悪魔の辞典』によれば、能力とは「野心の中でも、有能な連中と無能な連中とを区別する卑しい野心の一小部分の達成を可能ならしめる、生まれながらに身にそなわっているもの」だそうです。名だたる皮肉屋のバイスにあえば、能力も「卑しい野心」を実現させる力になってしま

いますが、わたしが問題にしたいところは、「生まれながらに身にそなわっているもの」というところです。

鎌倉時代の禅僧で道元という人物がおります。道元には『^{しょうぼうげんぞう}正法眼蔵』という大部の著作がありますが、そのなかの「^{ぶっしょう}仏性」の巻に、「仏性の道理は、^{じょうぶつ}成仏よりさきに具足せるにあらず、成仏よりのちに具足するなり。仏性かならず成仏と同参するなり」という一節があります。仏性はふつう「仏の性質」とか「仏になる可能性（能力）」と理解されていますが、その理解で道元の文章を読んでいきますと、混乱してしまいます。と申しますのも、仏性は、成仏以前から備わっているものではなく、成仏よりのち、よりの確にいえば、成仏と一緒にやってくるものだ、といっているからです。つまりその人の能力は、先天的なものではなく、その人がなにかを実現するときに一緒にやってくるものだということになります。

わたしたちはとすると、自分の能力の限界を感じたり、それを口にしたりしがちです。それはまた人の能力をも決め付けることにもつながるでしょう。それを道元は一喝したのです。この道元の立場は、わたしたちに実に多くのことを教えてくれます。人間は無限の可能性を秘めているということを。そして教育の“場”とはまさに、その可能性を模索し、また伸長する“場”にほかなりません。わが人文学部もそうした“場”でありつづけたと思っています。

13年前にこう書いた私の気持ちは今も変わりません。先生がた、職員のみなさん、そして学生の諸君にめぐまれ、楽しく過ごしたこの学園を去りますが、わたしはこれからも可能性を模索・実現すべく新しい歩をすすめたいと思っています。ありがとうございました。

略 歴

ふなおか まこと
船岡 誠 昭和 21 年 6 月 30 日生

1 学歴

昭和 40 年 4 月	明治大学商学部産業経営学科入学
昭和 44 年 3 月	同 卒業
昭和 44 年 4 月	明治大学大学院文学研究科史学専攻（日本史）修士課程入学
昭和 47 年 3 月	同 修了（文学修士）
昭和 48 年 4 月	明治大学大学院文学研究科史学専攻（日本史）博士課程入学
昭和 52 年 3 月	同 単位取得退学

2 学位

文学修士（昭和 47 年，明治大学）

3 職歴

昭和 52 年 10 月～昭和 60 年 8 月	立正佼成会史編纂委員
昭和 59 年 7 月～平成 5 年 3 月	放送大学非常勤講師
昭和 63 年 4 月～平成 5 年 3 月	明治大学一般教育兼任講師（歴史学）
昭和 63 年 4 月～平成元年 3 月	曹洞宗宗学研究所特別講師
平成元年 4 月～平成 2 年 3 月	明治大学文学部兼任講師（歴史学）
平成 2 年 4 月～平成 3 年 3 月	大東文化大学文学部非常勤講師（歴史学）

平成3年4月～平成5月3月	聖心女子大学文学部非常勤講師(日本文化論)
平成5年4月～現在に至る	北海学園大学人文学部教授

4 所属学会および学会役職

駿台史学会，日本史研究会，日本思想史学会，日本近代仏教史研究会（運営委員），北海道印度哲学仏教学会（常任理事），仏教史学会（評議員）

5 賞罰

昭和62年12月 駿台史学会選奨受賞（『日本禅宗の成立』）

6 学内活動等

協議会委員，研究室委員，将来構想委員，社会人特別入試委員，入試制度委員，予算委員，自己点検・評価作業委員，入試委員，人文学部長，教務委員，学生委員，市民公開講座委員，韓国協定校専門委員，国庫助成を進める教授会連合北海道協議会委員 大学院教務委員

7 研究業績

【著 書】

1. 『道元と正法眼蔵随聞記』単著 評論社 昭和55年12月
2. 『立正佼成会史』（全7巻）共著 佼成出版社 昭和58～60年
（笠原一男・下出積与・森岡清美・大隅和雄・速水侑・小栗純子・根本誠二・白水寛子・大橋俊雄が共同執筆者）
3. 『日本禅宗の成立』単著 吉川弘文館 昭和62年3月
4. 『沢庵』（中公新書）単著 中央公論社 昭和63年5月

5. 『道元を歩く』(写真紀行 日本の祖師) 共著 佼成出版社 平成4年3月(田村仁=写真 丹羽廉芳=序 船岡誠=文)
6. 『道元と国家・社会』(道元思想体系・第19巻) 編著 同朋舎出版 平成7年7月
7. 『道元』(ミネルヴァ日本評伝選) 単著 平成26年6月 ミネルヴァ書房

【論文】

1. 「紫衣事件と沢庵宗彭」(『駿台史学』34号 昭和49年3月)
2. 「道元の修学時代」(『歴史研究』161号 昭和49年6月 新人物往来社)
3. 「道元における自利利他の論理構造」(『日本仏教』38号 昭和51年8月)
4. 「道元の護国思想について」(下出積與博士還暦記念会編『日本における国家と宗教』大蔵出版 昭和53年12月)
5. 「道元禅師における自利利他の論理構造と冥合の論理」(『宗学研究』21号 昭和54年3月)
6. 「中世寺院の一存在形態——敦賀西福寺の事例——」(『日本宗教史研究年報』2号 昭和54年4月)
7. 「初期禅宗受容と比叡山」(今枝愛真編『禅宗の諸問題』雄山閣 昭和54年12月)
8. 「白隠禅の思想史的意義」(圭室文雄・大桑齊編『近世仏教の諸問題』雄山閣 昭和54年12月)
9. 「正法眼蔵随聞記の史料的性格」(『宗学研究』22号 昭和55年3月)
10. 「夢窓禅における倫理と宗教」(下出積與編『日本における倫理と宗教』吉川弘文館 昭和55年5月)
11. 「岐阜県における立正佼成会の発展」(立正佼成会教団史研究室編『佼成教団史の研究』中央学術研究所 昭和55年6月)
12. 「鎌倉仏教と神祇」(池田英俊・大瀧徹也・圭室文雄編『日本人の宗教の歩み』大学教育社 昭和56年7月)
13. 「禅と悟り」(池田英俊・大瀧徹也・圭室文雄編『日本人の宗教の歩み』大学教育社 昭和56年7月)
14. 「鎌倉初期における禅宗成立の史的意義」(『宗学研究』24号 昭和57

年3月)

15. 「鎌倉仏教における持戒の論理」(『歴史公論』87号 昭和58年2月)
16. 「奈良時代の禅および禅僧」(『宗学研究』25号 昭和58年3月)
17. 「近世初期禅僧の農民観」(『歴史論』7号 昭和59年1月)
18. 「日本禅宗史における達磨宗の位置」(『宗学研究』26号 昭和59年3月)
19. 「平安時代の禅僧」(『駿台史学』63号 昭和60年1月)
20. 「比叡山における禅師と禅衆」(『宗学研究』27号 昭和60年3月)
21. 「日本禅宗史における夢窓疎石の位置」(山本世紀編『論集日本仏教史室町時代』雄山閣 昭和61年8月)
22. 「中世寺院から近世寺院へ」(『日本文化の時・場』人間形成ゼミナール 昭和62年6月)
23. 「戦国名僧論」(中尾堯編『論集日本仏教史 戦国時代』雄山閣 昭和63年9月)
24. 「一休と養叟——一休論の再検討——」(『金沢文庫研究』283号 平成元年9月)
25. 「修証一等論の周辺」(『北海学園大学人文論集』2号 平成6年3月)
26. 「日本禅宗成立論続考」(『禅学研究』73号 平成7年1月)
27. 「盤珪永琢の生涯と思想」(圭室文雄編『民衆宗教の構造と系譜』雄山閣 平成7年4月)
28. 「峨山韶碩の歴史的位置」(石川力山編『妙応寺史』同朋舎出版 平成7年10月)
29. 「禅師の変質」(『印度学仏教学』10号 平成7年10月)
30. 「近世の禅——沢庵を中心に——」(『日本の仏教④ 近世・近代と仏教』法蔵館 平成7年12月)
31. 「禅僧の中国志向——巡礼から求法・伝法へ——」(『北海学園大学人文論集』6号 平成8年3月)
32. 「師僧華叟宗曇」(『国文学解釈と鑑賞』783号(特集風狂の僧・一休) 平成8年8月)
33. 「道元の結界論」(『印度学仏教学』12号 平成9年10月)

34. 「明恵の禅定思想」(速水侑編『院政期の仏教』吉川弘文館 平成 10 年 2 月)
35. 「日本的靈性について」(『北海学園大学人文論集』10号 平成10年 3 月)
36. 「禅病について」(大隅和雄編『中世の仏教と社会』吉川弘文館 平成 12 年 7 月)
37. 「沢庵の仏法断絶論」(『印度学仏教学』16 号 平成 13 年 10 月)
38. 「日蓮と禅」(『日蓮的あまりに日蓮的な』太田出版 平成 15 年 2 月)
39. 「沢庵と武家」(『北海学園大学人文論集』23・24合併号 平成15年 3 月)
40. 「紫衣勅許事件」(圭室文雄編『政界の導者 天海・崇伝』吉川弘文館 平成 16 年 7 月)
41. 「無底良韶と正法寺の開創」(科研成果報告書『東北仏教の世界——社会的機能と複合的性格——』平成 17 年 3 月)
42. 「道元の入宋」(『国文学解釈と鑑賞』888 号(特集聖地と巡礼) 平成 17 年 5 月)
43. 「道元禅における感応道交」(『印度哲学仏教学』20号 平成17年10月)
44. 「近世初期の庵主禅」(『印度哲学仏教学』23 号 平成 20 年 10 月)
45. 「沢庵と紫野の仏法」(『北海学園大学人文論集』48 号 平成 23 年 3 月)
46. 「円爾禅とその評価」(平成 22・23 年度北海学園学術研究助成共同研究報告書『新人文主義の位相——基礎的課題——』平成 24 年 3 月)
47. 「養叟宗頤考」(『北海学園大学人文論集』58 号 平成 27 年 3 月)

【その他】

1. 「隠元」「栄西」「沢庵」「白隠」(中尾堯・今井雅晴編『日本名僧辞典』東京堂出版 昭和 51 年 3 月)
2. 「『正法眼蔵随聞記』と道元——初期道元僧団をめぐって——」(『ばれるか』308 号 評論社 昭和 52 年 12 月)
3. 「道元と永平寺」(全集日本の古寺③『北陸・信濃の古寺』集英社 昭和 59 年 9 月)
4. 「鉄牛」(『人物でつづる千葉県社会福祉事業のあゆみ』崙書房 昭和 60 年 12 月)

5. 「沢庵宗彭とその時代」〔座談会（児玉幸多・伊藤克己・田中博美・船岡）〕（『品川歴史館紀要』2号 昭和62年3月）
6. 「百科問答 寺院と庭園はどういう関係があるか」（『月刊百科』314号 平凡社 昭和63年12月）
7. 「禅宗の成立と展開」（『歴史にみる日本人と仏教』放送大学教育振興会 平成2年3月）
8. 「明全の仏法と人柄」「古風禅への志向」（『曹洞宗教義法話体系』同朋舎出版 平成2年12月）
9. 「即の論理について」（『月曜ゼミナール』2号 平成4年11月）
10. 「道元」（『原典仏教福祉』溪水社 平成7年3月）
11. 「朝・幕・寺を巻き込んだ抗争“紫衣事件”の真相とは？」「沢庵宗彭」（歴史群像シリーズ62『徳川家光』学研 平成12年7月）
12. 「禅」（『日本仏教の研究法』法蔵館 平成12年11月）
13. 「興禅護国論」（『日本仏教の文献ガイド』法蔵館 平成13年12月）
14. 「沢庵と武蔵の「接点」」（『歴史読本 特集武蔵と小次郎』新人物往来社 平成15年3月）
15. 「圧力に屈しなかった三代将軍の師」「権力におもねらない林下の気概」「剣豪・柳生宗矩に見る禅と武道」「円相」（週刊朝日百科 仏教を歩く 23『沢庵と「武士道」』朝日新聞社 平成16年3月）
16. 「公開講演 沢庵の禅の世界」（『駒澤大学佛教學部論集』35号 平成16年10月）
17. 「円爾は三昧を発せず」（『北海道印度哲学仏教学会会報』22号 平成20年5月）